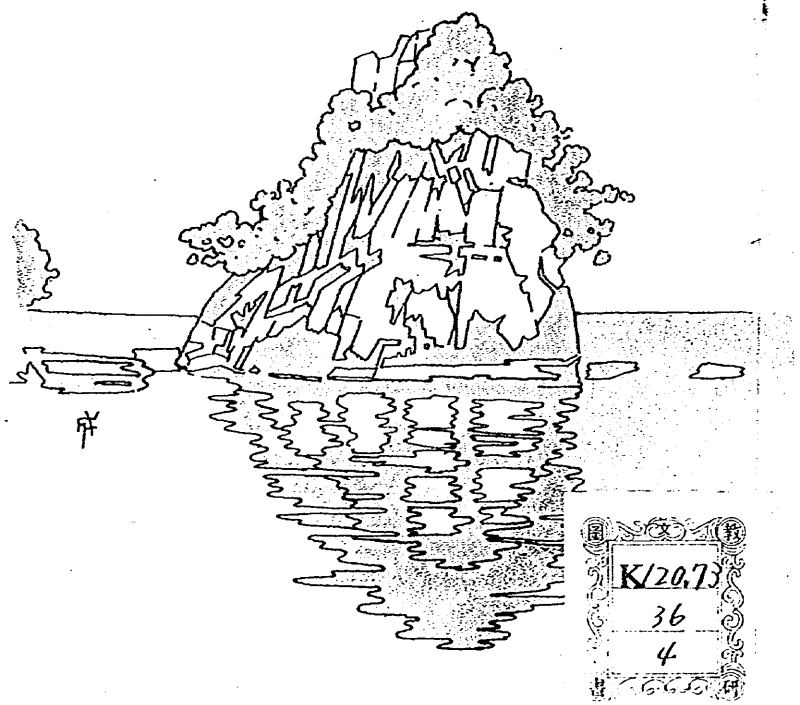
田村虎藏 編

國定小學讀本唱歌

高等科四學年



K120.73
36
4

修文館發行

K120.73
36
4

緒言

國定の小學讀本中の韻文は、さすがに、教育的に出來て居て、唱歌教材に、も、十分應用し得るものと思ふ。余は、是等韻文に曲節を附して、余が本職せる東京高等師範學校、附屬小學校の兒童に教授する考であつたが、たまたま、修文館主も、余と同じような意見を持して居るので、文部省の許可を經て、茲に本書を公にすることとなりました。

沼 8 30
8 8 内

惟ふに、このごろ、唱歌書類が續々と出版されます、故、是等の教材を各學年の程度に合せて取捨選擇するは、隨分手數のかかることである。然るに、國定の小學讀本中の韻文は、程度を逐うて出來て居る事は勿論、國語教授で、その意義をも兒童が十分會得して居るから、拙くとも、歌詞だ

けには、前述のような心配のなきのみならず、兒童をして、眞の興味を起させ、所謂教育的教授が出來ることと思ひます。

余、數年小學教育に從事して、聊か唱歌教授上に經驗もある故、この書を公にして、大方の批評を乞ふ事となった。若し、この書が、唱歌界に幾分なり貢献する所があるならば、余の光榮とする所であります。

猶、本書を編纂するについて、編者の用意を一言すれば、

一、曲節は、余が數年の實驗に徴して、兒童の嗜好に鑑み、その程度を考へて、順次、音樂上の發達を圖ることに力め、凡て、前後の連絡を保つように作ってあります。

一、韻文には、朗讀的と唱歌的との二種がある。例へば、國定の高等小學讀本中、一の卷にある「浦島子」の如きは、朗讀的韻文であるから本書にはこれを省いたのであります。

一、本學年の詞文は、何れも長い故に、唱謠に便ならしめんがため、曲節を輕快にした。又、新たに切分音（シンコペーション）を加へたれば、教授者は、特に注意されんことを望みます。

一、本書中、一音符に二文字を配當してあるのは、その音長を二等分するのであります。

明治三十七年十二月二十日

編者識す

國定小學讀本唱歌　高等科四學年

目次

強者強國……三
琵琶湖……七
勸學の歌……一二
處生の歌……二〇

強者、強國

一　強者存して、弱者滅び、
強國榮えて、弱國衰ふ。
天地開けし、　その時、このかた、
たれか、いづこか、　この理にはづれし。

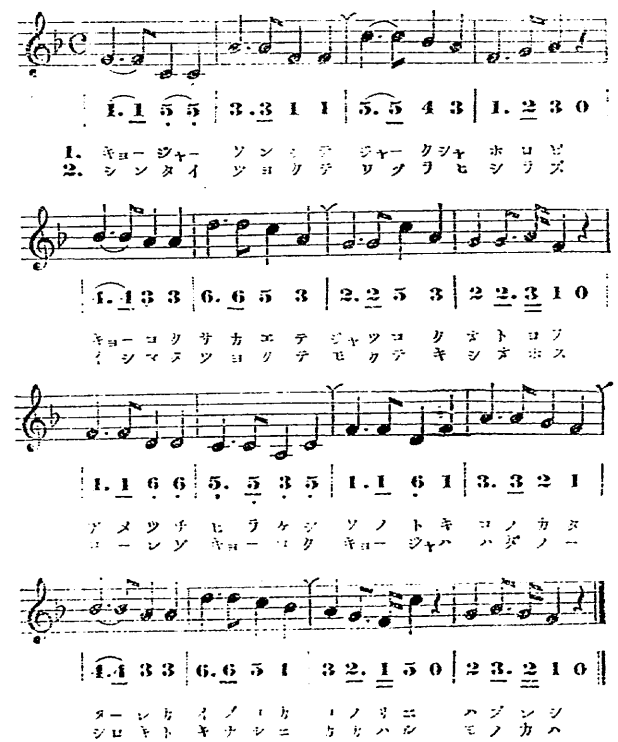
二　身體強くて、　わづらひ知らず、

三

強者強國

（ヘ調四拍子）

壯大ニ　　中等ニ



二

意志、また強くて、目的しおほす。

これぞ強者ぞ。　強者ははだの

白きと、黄なるに　かゝはるものかは」。

三

國民、あひ和し、實業榮え、

兵備たらひて、國威かがやく。

これぞ強國。強國は位置の

西と、東に　かゝはるものかは」。

四

強者存して、弱者滅び、

強國榮えて、弱者衰ふ。

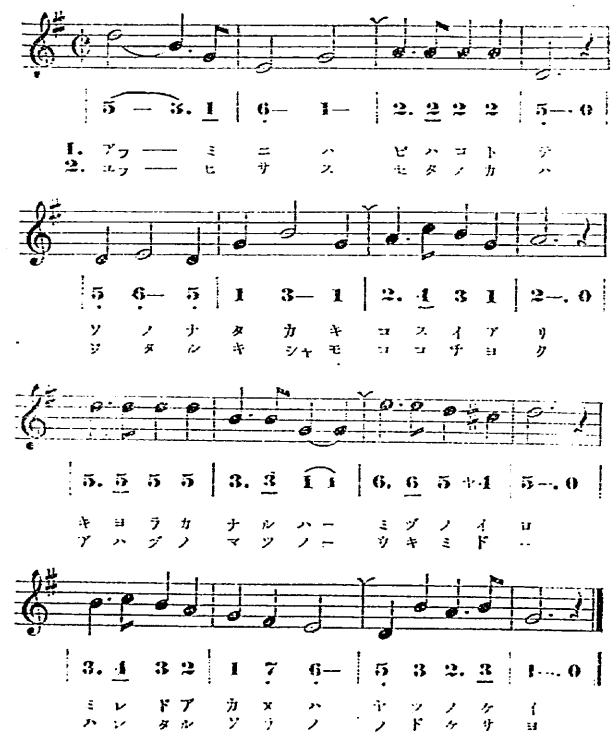
いでや、人々。　強者となれや。

なりて、この國　強からしめよや」。

琵琶湖

（ト調二分の二拍子）

優美ニ　　稍早ク



琵琶湖

一　近江には、琵琶湖として、
　　その名高き湖水あり。
　　清らかなるは水の色、
　　見れどあかぬは八つの景。

二　夕日さす勢田の川、
　　わたる汽車もこゝちよく、

粟津の松の色はえて、
晴れたる空ののどけさよ。

三

石山の秋の月、
雲をさまりて影清し。
冬の來りてさく花は、
比良のたかねの暮の雪。

四

唐崎の一つ松、
夜の雨に名をえたり。

五

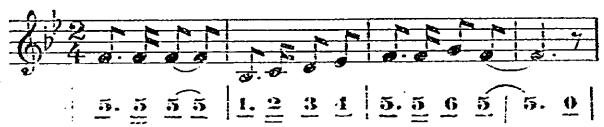
堅田の浦の浮御堂、
落ち來る雁のながめあり。

三つ、五つうちつれて、
波の上を歸り行く、
矢走の沖の舟人は、
聞きしか、三井の晩鐘を。

勸學の歌

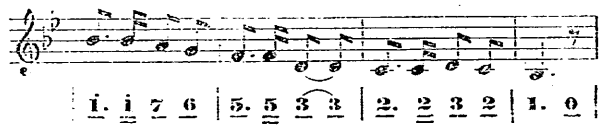
（變ロ調二拍子）

輕快ニ　　遲クナク



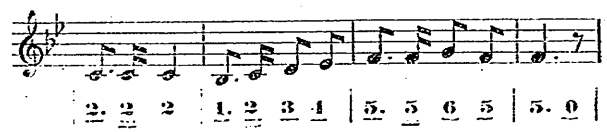
5. 5 5 5 | 1. 2 3 4 | 5. 5 6 5 | 5. 0 |

1. ムカシシーモロコジシュプンコ一テ
2. ヒガトニトコトヘノ一ケツキ
3. ハルノハツアニ一ヘ一ツ
4. ヒトスチナリシモノマナ



1. i 7 6 | 5. 5 3 3 | 2. 2 3 2 | 1. 0 |

ヨニスゲレタルーハカセニテリ
イニシノイマトニヨハユキ
ナーツアチパニフヒノチモ
ムーカシカシコキトタ

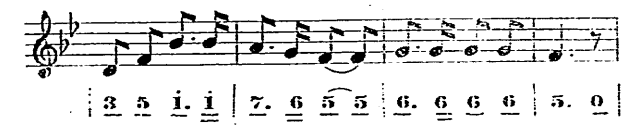


2. 2 2 | 1. 2 3 4 | 5. 5 6 5 | 5. 0 |

ミサバツケヒアラクド
ダカキリヤクナハレマニ
ウソシツヤリイアサケリ
カタシトナホモナリキ

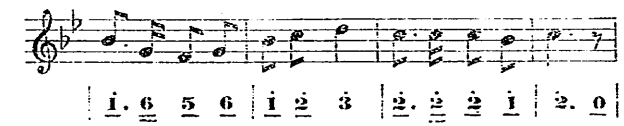
勸學の歌

（つづき）



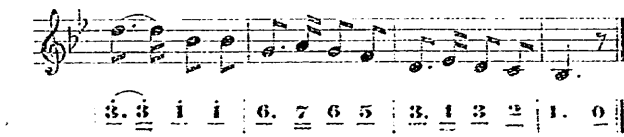
3 5 i. i | 7. 6 5 5 | 6. 6 6 6 | 5. 0 |

トシヲカシトテ一オコミルハナ
マナビコロチニ一タヨサアヌマテ
イーマハカゾヘモアヘヌマテ



i. 6 5 6 | i 2 3 | 2. 2 2 i | 2. 0 |

タトヘバハルノユメゾカシテ
ヒトギシレアレバオカナハツシ
スヲカレタルヒバイカニツテ



3. 3 i i | 6. 7 6 5 | 3. i 3 2 | 1. 0 |

サーメモハテヌニオイクトシ
ナーカオナアーキハアリマクシ
マナビヨゾヒートノハジムバキ
オホヨゾヒトノ

勸學の歌

一　昔、もろこし朱文公、
　　世にすぐれたる博士にて、
詩をば作りていひけらく、
　「年わかしとて怠るな。
たとへば、春の夢ぞかし。
　　覺めも果てぬに老いゆく。」と。

二　東と西と、國[illegible]だて、[illegible]
　　[illegible]いはし[illegible]、今も、世はかはり、
高き、いやしき品はあれど、
　　[illegible]學の道にたづさはる
人としあれば、お[illegible]なべて、
　　[illegible]歎はありぬべし。

三　春の初花、秋の月、[illegible]
　　[illegible]夏の青葉に、冬の雪、

移り行く世の有様に、
心驚くときあらば、
過ぎし月日を數へつゝ、
學の業を勵むべし。」

四

ひとすぢなりし物まなび、
昔賢き人たちも、
「難し。」と、なほも歎きけり。
今は、數へもあへぬまで、

わかれたるをば、いかにして、
おほよそ人のなしうべき。」

五

さはいふものゝ、諺に、
「塵ひぢ積りて、山となり、
滴つもりて、海となる。」
いそぐとも、世にかひあらじ。
心しづめて、いつまでも
怠らぬこそ賢けれ。」

六

たとひ、あまたにわたらずと、
[illegible]ひとふしをだに修めなば、
身のためとなること多し。[illegible]
[illegible]きらずば、虫に劣るべし。
蜘蛛は網はり、蜂は、文、[illegible]
[illegible]蜜をつくるを見よや。見よ。
勉めや、勵めたゆみなく[illegible]
[illegible]進みくて、よどみなく。

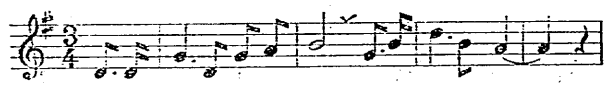
七

難きことゝて厭ふなよ。
學の海に、舟路あり、
教の山にしをりあり。
なにかおそれん。おそるまじ。

處世の歌

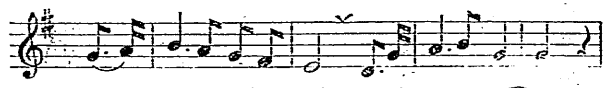
（ト調三拍子）

快活ニ　　稍早ク



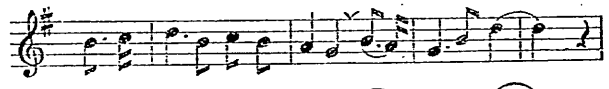
5. 5 | 1. 5 1 2 | 3— 1. 3 | 5. 3 2 | 2 0 |

1. キン　ベンナレ　ヨー モノゴトニ ー
2. ヒャク　セツタリ　マメ セイジンハ ー
3. ヨニ　アルヒト　バー タレモミナ ー
4. カラ　ダニツネ　ニー チューイシテ ー



1. 2 | 3. 2 1 7 | 6— 5. 1 | 2. 3 1 | 1 0 |

チュー　ジツナレ　ヨー モノゴトニ ー
タノリ　トツプジエ　ガー カギイリ ー
ジツ　センナレ　チー ハカルベシ ー
ケン　センナレ　トー ネガフベシ ー

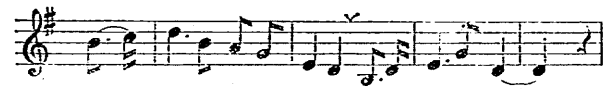


3. 4 | 5. 3 4 3 | 2 1 3. 2 | 1. 3 5 | 5 0 |

キン　ベンナラン　デハコー ナラズセ ー
セヤク　ンンパコー　ハハコー ナチオ ー
ナカ　ンンツモ　ソケハガ　ホグ ー

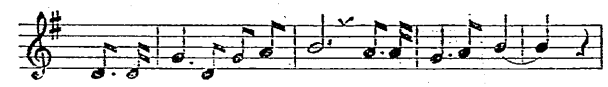
處世の歌

（つづき）



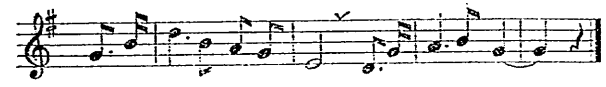
3. 4 | 5. 3 2 1 | 6 5 3. 5 | 6. 1 5 | 5 0 |

チュー　ジツナラ　デハミハ　タタズ ー
セイ　コーミチ　ピタリヨー　キョージ ー
ミチ、アヤマー　ルハトー　キナリ ー
ヒャク　ビョーノモ　トトイフ　ゾカシ ー



5. 5 | 1. 5 1 2 | 3— 2. 2 | 1. 2 3 | 3 0 |

シタ　シムベキ　ハー キンレ　ベンヨ ー
セタ　シンバキン　クハリレ　ドチノ ー
ダニ　ノミスガ　ルー ドレイ　ジンー
コト　ニヒンコ　——ツツ　シミテ ー



1. 3 | 5. 3 2 1 | 6— 5. 1 | 2. 3 1 | 1 0 |

トホ　ザクベキ　ハー タイ　ダナリ ー
チカ　ライタコト　スー シキ　ンセキ ー
ドレ　イノコト　ロー モツ　ナユメ ー
キズ　ナキヒト　トー ナレ　ヨナレ ー

處世の歌

二　勤勉なれよ、物ごとに。
　　忠實なれよ、物ごとに。
勤勉ならでは、功成らず、
　　忠實ならでは、身は立たず。
親むべきは勤勉よ。
　　遠ざくべきは怠惰なり」。

二　百折たわまぬ精神は、
　　貴ぶべきがかぎりなり。
千辛萬苦はなにならず、
　　成功導く良教師。
千辛萬苦は、われどちの
　　力をためす試金石」。

三　世にある人は、たれも皆、
　　自立自營をはかるべし。

着實こそは功を成せ、
身を誤るは投機なり。
他にのみすがる奴隷心、
奴隷の心持つな、ゆめ。

四

からだに、常に注意して、
健全なれと願ふべし。
中にも、酒は害多く、
百病のもとゝいふぞかし。

五

殊に、品行つゝしみて、
疵なき人となれよ。なれ。
儉約こそは家を興し、
身をも立つべき基なれ。
無益の費はぶきつゝ、
いさゝかにても、財を積め。
いさゝかづつも貯へば、
塵も積りて、山となる。

六　規律正しく、身をもたば、
　　ならひ性ともなりぬべし。
約せし時間たがへぬも、
　　すべての約に從ふも、
常に守れる規律より
　　起れることよ、おのづから。」

七　相助くるは人の道、
　　人あはれむは人の道。

人の不幸を見すぐすは、
　　人の人たる道ならず。
不幸の人に逢ひたらば、
　　我身をつみて惠むべし。」

八　かく思ひなば、我家も、
　　我身も、常に榮ゆべく、
社會に出でては、よき人と、
　　社會の人にいはるべく、

國家にありては、すぐれたる
國民とこそなるべけれ」。

九

重荷を負ひて、遠き道
行くにぞ似たる、人生は。
心しづかに、いそがずて、
德をば修め、智をみがき、
御國のために勵みつゝ、
國の光をかがやかせ」。

國定小學讀本唱歌 終

明治三十八年一月二十四日印刷
明治三十八年一月二十七日發行
明治三十八年三月二十五日訂正再版印刷
明治三十八年三月二十九日訂正再版發行

國定小學讀本唱歌
高等一、二、三、四 各金五錢

編纂者 田村虎藏 東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者 渡邊鐵藏
發行者 鈴木常松 大阪市南區鹽町通三丁目八十番屋敷
印刷者 大西錬三郎 東京市麹町區有樂町三丁目一番地
印刷所 三協合資會社 東京市京橋區弓町二十四番地

不許筆記代用

著作權所有

不許複製轉載

發行所 修文館 東京市神田區錦町一丁目
積善館 大阪市南區鹽町通三丁目
大阪市東區安土町四丁目